

民も市民も戦乱に乗じて略奪に走るのである。これは彼らの生存様式の一つであり、中華文化の伝統である。

だから中国人には、日本軍人のもっていた「誇り」というものを理解することができず、日本軍の「三光」も真実だと思いつく。また同様に、日本軍の残虐性をふれてまわる日本の進歩的文化人も、日本人でありながら「誇り」というものを知り得ない欠陥人間なのかも知れない。

当時日本では、中国の住民が日本軍の進駐を日の丸で歓迎する光景がよく報道された。「兵匪」を駆逐した日本軍が、各地で歓迎されていたのは事実である。

⑥ 「七三一部隊」はBC兵器を開発したのか

■風土病・伝染病対策として設立された石井部隊

日中戦争中の日本軍に關し、近年「南京大虐殺」と並んで、ことさら非難されるようになったのがBC兵器、つまり生物（細菌）兵器と化学兵器の使用、そして生体実験である。

この問題でもっとも知られるのが、悪魔の細菌部隊こと「七三一部隊」だろう。日本各地ではよく全国巡回の「七三一部隊」に關する写真展が図書館などで開催される。私もたまにそのようなものを見に行くが、会場には日本人より中国人の方が多いことがある。ひよっとしたら彼らは

歴史の証人を装っているのか、それとも臨時解説員だろうか。

日本陸軍は日露戦争直後、伝染病の防御・統制を行なうため「野戦防疫部」を設立した。その後それは「防疫給水部」に再編され、関東軍・北支軍・中支軍・南方軍などに置かれた。関東軍防疫給水部（ハルピン）を指揮したのが石井四郎軍医中將率いる第七百三十一部隊（石井部隊）だった。

石井部隊を有名にしたのは『悪魔の飽食』（森村誠一著、カッパ・ノベルス、一九八一年）である。だが、実際の活動は何だったのか？ はたして、細菌兵器などの研究に特化された部隊だったのは本当なのか。

日本軍が中国戦線でもっとも悩まされたのは、中国軍の攻撃というよりも、不衛生きわまりない環境であり、風土病・伝染病だった。ペスト・マラリア・赤痢・コレラ・梅毒・腸チフスと、感染症ならなんでもあり、日本軍の戦傷病死者は戦死者を上回っている。だから日本軍は防疫に力を注がなくてはならなかった。

中国のこうした状況は今も変わらない。たとえばWHO（世界保健機構）の報告では、揚子江流域のB型肝炎キャリアは一億人以上だ。北京市民の九〇パーセント以上が寄生虫を持っており、日本にいる中国人留学生の大多数が結核だとも報じられている。

また中国は日本と違い生水は飲めない。そこで設けられたのが給水部隊だった。

■アメリカ機密文書「細菌兵器開発予算は二割にすぎなかった」

それではなぜ、石井部隊はBC兵器の開発に携わったのか。

その真相については、アメリカの機密文書「フェル・レポート」と「トムソン・レポート」がもっとも詳しく正確とされている。これらは終戦直後、アメリカ軍が石井軍医中将はじめ同部隊幹部に対して行なった聞き取り調査の報告書である。

それらによると、同部隊の任務とした研究内容は、「防疫・診断・治療・薬品・衣食代用品・浄水給水・輸送・航空機および弾頭細菌の防疫・ワクチンや血清の製造」であり、細菌兵器の開発は総予算の「二〇パーセント（一〜二パーセントとも）」にすぎなかった、とある。たしかに細菌兵器の開発は行なわれていたが、その規模は想像以上に小さなものだ。

細菌兵器の開発に着手した理由については、「石井は一九二二年のジュネーブでの国際連盟軍縮会議で細菌兵器が公式に禁止されたため、戦争時に潜在的兵器になると考えた」（「フェル」）、
「ソ連・中国軍の細菌兵器による妨害行為の疑いが、石井を細菌兵器開発に駆り立てた」（「トムソン」）などと述べている。あくまでもソ・中両軍に対する防衛的な動機だったことを明らかにしている。ちなみに同文書は、十五カ所にのぼるソ連の細菌開発所の存在も明らかにしている。

また「細菌爆弾は初期的実験にとどまり、また航空機による細菌散布も実験ののち非現実性が

判明した」（トムソン）とし、兵器開発が失敗したことも伝えている。その理由としては「防御用だったこと、開発に公式指令がなかったこと、資材が不足したこと、軍上層部に理解がなかったこと、報復を恐れたこと」（同）などを挙げている。なおこれら文書には、世にいわれる「生体解剖」「凍傷実験」「真空実験」「中国人の大量虐殺」を裏付ける記述はいっさいない。

医師で石井部隊の元幹部だった佐々木義孝氏は、「死刑囚の生体実験は」せいぜい一週間に二人ぐらい。あくまで細菌戦に必要な生体実験と、その結果必要な専門家による死体解剖」だけを行ない、「人為的に伝染病を起こすことは不可能だった」と語っている（「世界日報」、昭和五十七年十月十七日付）。

このほか、石井部隊に関する多くの著述が化学兵器開発との兼ね合いを取り沙汰しているが、いまだそれが実証されないとどこに何らかの疑念が生じる。

■中国軍が実行したBC兵器攻撃

化学兵器や細菌兵器の使用はむしろ中国人が元祖といえる。中国史には皇帝・皇太子その他政治家が毒殺されるエピソードが多いからである。

日中戦争当時、むしろ中国軍のほうが「弱者の兵器」（貧者の核兵器＝生物化学兵器のこと）として毒ガス等の化学兵器を使用し、日本軍を攻撃していた。それが威力を発揮しなかったのは、

科学技術の遅れで大規模な製造ができず、また実験製造施設が日本軍に占領・没収されたからだ。そこで結局それに替わり、伝統的な水攻め（大河決壊など）、火攻め（焚城など）を多用したといえる。

中国軍によるBC兵器テロには、コレラ菌・炭疽菌・赤痢菌・腸チフス菌・パラチフス菌などの細菌、砒素・昇汞・昇汞青酸・亜砒酸・アトロピン・硝酸ストリキニーネなどの毒物が使用された。よく取られた方法としては、メリケン粉に砒素を混入したり、綿に浸したうえで町中に撒布する、昇汞や昇汞青酸を井戸に投げ入れる、亜砒酸を酒保（軍隊の売店）販売菓子に混入するなどがあった。この他、コレラ菌を西瓜や真桑瓜まくわうりに注入したり、砒素を湯沸釜に入れるなど、じつに様々である。

昭和十二（一九三七）年七月から十五年十一月までの華北の日本軍における疫病発生統計によると、赤痢・腸チフス・パラチフス・発疹チフスの感染者が年々急増しており、このころすでに細菌テロの可能性が指摘されていた。

昭和十二年九月、上海戦線の日本軍にコレラで倒れる者が大勢出た。第十軍参謀長・田辺盛武少将は、「支那軍の指令を奪取せるところ、其の中に井戸水を飲用すべからずとの指示あり。即ち敵が井戸に細菌を投ぜしものと察せらる」とし、全軍に警戒を促している。